

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

母が家出し、父親違いの幼い弟とふたりで暮らす「わたし」。ある日、「わたし」が子猫の声がする段ボール箱を開けたら、そこには瀕死状態の一匹の子猫と死んだ数匹の子猫たちが入っていた。友達の健一と一緒に、生き残った子猫を獣医さんにみてもらうが、命は長くないといわれ、子猫をつれて帰ってくる。

うちは母子家庭^{ぐわ}で奴^{やつ}だった。母ひとり、子ふたり。お母さんとわたしとコウちゃん。お父さんはずっと前からいなかった。お父さんといっても、少々複雑なことに、ふたりいる。ひとりめは私の種を撒^まいた人で、わたしが二歳のときに病気で死んでしまった。ひどくあつけない死に方だったそう。夕方に胸が痛いと言い出して、その日の夜には息を引き取った。急性心不全^{きゅうせいしんふぜん}だった。

「眠^{ねむ}ってるようにしか見えなくてね、困^{こま}っちゃったわよ。いつまでたっても死んだ気がしないんだもん」

お母さんは最近になってもそんな言葉を口にすることがあった。十五年も前のことなのに、まだ気持ちの置き場所を見つけれないでいるらしかった。二番目のお父さんと揉^もめてるときも、お母さんは一番目のお父さんのことをよく口にした。

「あの人のほうがずっといい人だった」

¹ 眩^{くら}くお母さんは、いつもどこか遠くを見ていた。

「生きていてくれたら、うちはずっと幸せだったのに」

それはお母さんの希望にすぎなかった。お母さんの望み通りになった可能性もあるけれど、やっぱりどこかで壊^{こわ}れてしまっただかもしれない。こんなことを思うのはお母さんに悪いけど、お母さんは幸せを掴^{つか}むのが下手だ。掴^{つか}んでも、それが幸せだとは気づかずに、自分で投げ捨ててしまったりする。

お母さんが一番目のお父さんを懐かしむのは、それが希望のまま途切れてしまったからなのだろう。その希望を、わたしは知らない。

たった二歳だったのだ。

だから、わたしは死の意味も知らない。²

すき焼きのお肉はとても食べられなかった。だけど、誕生日を楽しみにしているコウちゃんに事情を知られるわけにはいかなかった。夕食係を健一君に任せることにした。さすが男の子だ。健一君は「頑張ってみるよ」と言っ、その役目を引き受けてくれた。

ありがとう、健一君。

心の中で、何度もお礼を言っ。

ありがとう。

そうして健一君とコウちゃんがすき焼きをしているあいだに、わたしは死んでしまった子猫たちを庭にこっそり埋めた。兄弟だから、全部同じ穴に埋めることにした。最後まで、死ぬ瞬間まで、いっしょにいたのだ。死んでもいっしょにいたいだろう。新しいお墓の前で、わたしはぼんやりしたまましゃがんでいた。リビングのほうから、健一君とコウちゃんのはしゃぐ声が時折聞こえてきた。健一君はその言葉通り、頑張ってくれているらしい。悲しいことがあつたなんて、微塵も感じさせない声だった。

さあ、家に入ろう。お肉は食べられないけど、とにかく明るい顔と声でコウちゃんの誕生日を祝ってあげよう。何度も何度もそう思っ、やっぱ駄目だった。足が動かない。立てない。ああ、なんだろう。心も動かない。どっしりと座ったまま。あれほど鮮烈だった悲しみさえも今は消え去っている。痛みも喜びも悲しみも苦しみもわからない。猫を捨てた奴に対する怒りもなかった。わたしはいつまでもいつまでもしゃがみ込んでいた。そうか、こうして心もしゃがみ込んでいるのかもしれない。いつ、どうやって、立てばいいんだろう……立てるんだろうか……。

やがて健一君がやってきた。

「子猫、ミルクを飲んだよ」

「え、ほんとに」

「獣医さんが言っ通り、スポイトで口に入れてやったら飲み込んだ。けっこう飲むんだ。あれだけ飲むんなら、大丈夫かもしれないぞ。コウの奴さ、あの子猫、誕生日プレゼントだと思ってるみたいだ。すごく喜んでる」

助かるといいな。健一君が咳くように言っ。

うん。わたしは肯いた。

よりにもよって、なんでこんな日なんだろう。コウちゃんの誕生日だなんて最悪だ。あの子猫はいつ死んでしまうかわからない。明日の朝には冷たくなっているかもしれないのだ。だとしたらコウちゃんにとっては最悪の誕生日だ。

細い月の光と、リビングから漏れてくる照明の光が、真新しいお墓を淡く照らしていた。

「なんて言えばいいのかな」

お墓を見つめながら、わたしは尋ねた。

1

「僕もよくわからないよ」

「コウちゃん、生き物が死ぬってこと理解できるかな」

今は無理だと思う。健一君が言った。

「そういうのって理屈じゃないから。なんていうかな、積み重ねていつて、自然と身につけるものなんだと思う。そのまんま、全部呑み込むっていうかさ。理屈とかじゃなくて。六歳じゃまだ無理だよ。これから時間をかけて覚えてくしかない。でもさ、そうして身につけたものって強いよな。理屈で覚えたものよりさ。意味もわけも知らないまま呑み込んだもののほうがさ、しつかりわかってるよな。そういうわけかさ」

ああ、その通りだ。

なにもかもが突然やつてくる。こちらの都合などおかまいなし。通り雨のように、わたしたちをいきなりずぶ濡れにしてい。お父さんたちがいなくなったときも、お母さんが家出したときも、わたしはそういうことを意味もわけも知らないまま呑み込んできた。決して理屈などではなかった。

夜風が吹いて、前髪を揺らしていった。

「健一君にもそういうことってあるの」

「もちろんあるよ」

「足のこと？」

それはまだ無理なんだ、と健一君は言った。

「今でも足が動くような気がする。朝起きたとき、左足でベッドから下りようとしちゃったりとか、なにか落として拾おうとしたらコケたりとか。昨日も道路でコケたんだ。ほら、歩道って少し高くなってるだろ。十センチくらいだけど。交差点渡るときにちよつとズルしてさ、車が来てなかったから真ん中を横切って、それで歩道の高くなつてるところに乘ろうとしたら、足が上がないんだよ。爪先が引つかかって、頭から突っ込む感じで転んだ。まるでギャグみたいだったよ。近くにいたお姉さ

んに笑われて、すごく恥ずかしかった。いつまでたっても全然慣れなくて困るよ。リハビリしてれば、そのうち普通に動くようになるらしいからいいんだけどさ」

「だけど、もうサッカーはできないんだよな」

「まあね。でも、そっちは諦めついてる。サッカーしてると、たまにあるから。怪我で引退とかって。プロ選手が同じような怪我で駄目になつてるのも知ってるしね。そういうのに比べたら、僕なんてちよつと引退が早くなつたくらいだよ。どうせ高校でサッカーはやめちゃうんだし」

言葉は切れたけど、思いが切れていなかった。それがわかったので、わたしは黙っていた。やがて健一君は話の続きを口にした。「でもさ、変なのな。僕より、周りのほうが諦めついてないんだ。母さんとか、今でもずっと気にしてるし。サッカー部の先生とか、チームメイトとかも」

そういうのが参るよなあ。健一君は繰り返した。ほんと参るよなあ。彼の声は確かに参っていて、なのに少し笑っていた。心が動き出したのは、そのときだった。

「ごめん、わたし、泣く」

ちゃんと宣言してから、わたしは顔を伏せた。

「しばらく放っておいて」

「ん」

肯き、健一君は放っておいてくれた。そしてなにも喋らず、肩なんかを抱いたりもせず、ただ横にいてくれた。

涙はどんどん溢れてきた。涙腺が見事に壊れてしまっていた。そうして涙を流すのは、とても気持ちよかった。どこかにつかえていたものが少しずつ溶けていった。喉が引き攣る苦しささえも心地よくて、わたしはだらだらと涙を流し続けた。鼻

水だつてばたばたこぼれた。こんなふう泣いたのは、たぶん生まれて初めてだった。お母さんが二番目のお父さんと離婚したときも、お母さんが家出したときも、わたしはまったく泣かなかった。悲しくさえもなかった。たくさんの死んだ猫を埋めたときも、やっぱり泣きはしなかった。なのに、どうして今は泣いているんだろう。誰のための涙なのか。わからないのに、ただ涙は溢れ続けた。

わたしの涙が、鼻水が、真新しい墓の上に落ちていく……。

ごめんね、子猫たち。別にあなたたちのために泣いてるんじゃないんだ。たぶん抱えきれないから、それを涙にしてるだけなんだろう。あなたたちはどれくらい生きられたの。一カ月もなかったよね。埋める前に洗ってあげればよかったね。何色の毛をしたのかもわからなかったもんね。

そうしてずっと泣いているうちに、涙は自然とおさまった。月の落とす光が、影が、少しだけその角度を変えていた。

「家に入ろう、みずき」

健一君が言った。

膝に手を置いて、わたしはゆっくり立ち上がった。

「そうだね」

そして気づいた。

わたしは立っていた。

ああ、よかった、ちゃんと立てたんだ……。

（『猫泥棒と木曜日のキッチン』橋本 紡）

問1 — 1について、お母さんが見ている「どこか遠く」には何があるのか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア これからの生活についての不安。

イ 自分が生まれてから今に至るまでの記憶。

ウ 二番目のお父さんへの怒りや不満。

エ 一番目のお父さんとの幸せな思い出。

問2 — 2について、ここでは「わたし」が母の希望や父の死をどのようにとらえていることが読み取れるか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母の希望は父と共に存在するものだったため、父の死は、父と共に存在した母の希望がなくなることでもあったのだと考えている。

イ 母の希望は父と共に幸せな家庭を築くことだったが、母は幸せをつかむのが下手な人だったため、その希望も失われたと考えている。

ウ 母の希望は希望に過ぎない夢物語で実現することができなかったため、父は無念の死をむかえることになったと考えている。

エ 母の希望は子どもにたくされており、父が亡くなったことにより子どもにたくした母の希望までもがなくなつたと考えている。

問3 — 3とはどのような心の状態か。二十字程度で説明しなさい。

問4

1 にあてはまる最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 子猫が逃げ出したこと、コウちゃんになんて言えればいいのかな
- イ お母さんが家出をしたこと、コウちゃんになんて言えればいいのかな
- ウ 子猫が死んじゃったら、コウちゃんになんて言えればいいのかな
- エ お母さんが死んじゃったら、コウちゃんになんて言えればいいのかな

問5

4から健一のどのような心境が読み取れるか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア サッカー選手になりたいという健一の夢を近所の人たちが応援していることについて照れくさい気持ちでいる。
- イ サッカーができなくなった健一のことを先生や親がずっと気にしていることについて困っている反面、うれしい気持ちでいる。

ウ 健一のリハビリが順調に進むよう家族と友達が気をつかっていることについてうとましく感じている反面、ほっとした気持ちでいる。

エ 健一のサッカー選手になる夢をあきらめさせまいと父が懸命な努力をつづけていることについて、あきれた気持ちでいる。

問6

5について、何が抱えきれないのか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 子猫たちの死や健一君の足のけがなど、自分さえ気を付けていれば防ぐことのできた様々なものごと。
- イ 父の死や自分が立てなくなってしまったことなど、母がしっかりしていれば起きなかった様々なものごと。
- ウ 両親の離婚や母が家出したことなど、自分ではどうすることもできない様々なものごと。
- エ 弟や生き残った子猫など、これから自分と健一でなんとかしていかなくてはならない様々なものごと。

問7

6について「わたし」が立てるようになった理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 一匹だけ残った子猫がミルクを飲んだことで、これからの自分の将来に希望をもつことができたから。
- イ 健一が強く励ましてくれたことにより心がなごみ、人に対する信頼を取り戻すことができたから。
- ウ 弟が子猫をととても大切にしているのを見て、他の子猫たちに対する罪悪感が少しずつとれていったから。
- エ 健一との会話で心が動き、涙を流すことで今まで心につかえていたものが消えていったから。

問8

本文から読み取ることができ「わたし」にあてはまるものには○、あてはまらないものには×をつけなさい。

- ア いつも孤独で人を信じることができない。
- イ 兄弟が悲しい思いをしないように考えている。
- ウ 生き物に対して思いやりがある。
- エ 何があっても感情を表に出さず、みえをはる。
- オ 正義感にあふれ、自分の気持ちに正直である。

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

生物がたがいどうし影響を及ぼしあいながら、ともに相手あつての適応をとげていくことを共進化^{きやうしんか}と呼びます。共進化は、両者にとつて最適のところ安定して止まることもあります。I 片方が相手を出し抜くと、相手^{II}がそのうちそれよりも上手の戦略を編み出し、さらにもう一方がまた相手を出し抜き、というように止めどもなく進化が起ることもあります。このような状態を、進化的軍拡競争と呼びます。では、このような共進化と軍拡競争がどのようなものか、いくつかの例を見てみましょう。

アリがチヨウの羽をひいていく

ああ、ヨットのようだ

という、三好達治^{みよし たつじ}の詩がありました。アリとチヨウの共生関係を考えるたびに、私はこの詩を思い出します。この詩にうたわれている光景は、アリが、死んだチヨウの羽を食物として巣に持って帰るところでしょう。しかし、たがいがもつと密接な関係を^{II}持っているような種類もたくさんあります。

² シジミチヨウ科に属^{ぞく}するチヨウでは、そのおよそ三分の一がアリと共生しています。この科に属するチヨウのいろいろな種類は、南北アメリカ、アフリカ、東南アジア、オーストラリアと、世界に広く分布しています。どこに住んでいる種でも、アリと共生しているのは幼虫で、チヨウの幼虫が特別の腺^{せん}から出す甘露^{かんろう}をアリがなめ、幼虫の方は、捕食者^{ほじよくしや}に食べられないようにアリに守ってもらっています。しかし、そうするためには、チヨウとアリとの間で、絶妙^{ぜつみょう}のチームプレイがなくてはなり

ません。

東南アジアに住んでいる^{※1} *Anthene enolus* という種類のチヨウは、必ずツムギアリと共生関係にあります。チヨウの母親は、幼虫の食草であるマメ科の木に産卵しますが、ツムギアリの巣がある木でなければ産卵しません。卵から孵化^{ふか}した幼虫は、うろうろと歩き回ってアリに見つかります。すると、アリは、幼虫を持ち上げて自分たちの巣の中に運んでいきます。この幼虫は、ツムギアリの巣の中でなければ生きられないのです。

A

まるで、抱^だっこをねだる赤ん坊のようですね。

そこで満腹になるまで若芽を食べた幼虫は、また、アリに触^{さわ}られたときに頭と胸をそらし、アリに運ばれて巣の中に戻ります。アリはときどき、幼虫がまだ食事を終えていないのにどこかへ運ぼうとするのですが、そういうときは、幼虫は、頭と胸をそらす姿勢をとらず、運ばれるのを拒否します。三齢、四齢になった幼虫は、もうアリに運ばれません。もう十分大きくなっていますし、触られても頭と胸をそらす姿勢をとらず、自分で葉をむしゃむしゃと食べます。

オーストラリアに住んでいる^{※2} *Jalmenus evagores* というチヨウの幼虫は、主食は木の葉ですが、どの木の葉を食べるかということでは、とくに好みはありません。それよりも、このチヨウの母親は、産卵のときに、アリが、アブラムシなどの同翅目^{どうしもく}の昆虫といっしょにいるような木を選びます。と言うのは、卵からかえったチヨウの幼虫は、この同翅目の昆虫が出す甘露^{かんろう}をなめるからです。アリは、チヨウの幼虫が出す甘露をなめると言いましたが、同翅目の昆虫の幼虫も同じような甘露を出すので、アリがそれをなめるかわりに彼らを保護しています。

1

このチヨウの幼虫は、同じアリに保護されて甘露を出す他の昆^{こん}

虫の甘露を自分がなめていることになります。

インドネシアのスラヴェシ島に住んでいる^{※3} *Allotinus major* というチョウの雌は、同じように、アリと共生関係にあるアブラムシのいるところに産卵します。

2、卵から孵化したチョウの幼虫は、先ほどのオーストラリアの種とは違って、アブラムシの幼虫の出す甘露ではなくて、アブラムシそのものを食べてしまうのです。これは、ちょっとずるいですね。

しかし、南アフリカに住んでいるこの科のチョウの二種では、アリとの間の共生関係に少しずれが生じています。このチョウの一齢幼虫は、ある木の花を食べます。特別な腺から甘露を出し、それをアリがなめるところは同じです。

3、花を食べて少し大きくなった幼虫は、あの東南アジアの種と同じようにして、アリに運ばれてアリの巣の中に入ります。ところが、この幼虫は、一旦アリの巣の中に運ばれたあとは、なんとこれまで共生関係にあったアリのさなぎや幼虫を食べてしまうのです。

これは、まったくのルール違反ですね。しかし、このアリはそれに対抗するすべを持たないようです。

日本のシジミチョウにも、アリと密接な関係を結んでいるものがあります。

4 クロシジミは、コナラ、クヌギなどの枝に産卵し、幼虫は、そこにいるアブラムシの出す甘露をなめて育ちます。ところが幼虫が三齢になると、クロオオアリが幼虫を見つけて、自分たちの巣の中に持ち帰ります。アリはシジミチョウの幼虫を養い、幼虫は腹の腺から蜜を出してアリになめさせます。日本のクロシジミとクロオオアリの関係はこのようなもので、だましたり、出し抜いたりの関係はないようです。

巣の中で羽化したチョウは、いちはやく地上に出て、羽を伸ばして飛び去ります。

つまり、シジミチョウ科のチョウは、捕食者から身を守るためにアリを保護者にし、そのお返しに腺から分泌する甘露をアリになめさせるということを始め、アリも行動をそれに同調させるように進化しました。そのうち、この科のチョウの中には、

同じアリと共生しているアブラムシの仲間が出している甘露を失敬するものが出てきたのでしょう。そして、さらには、そのアブラムシ自体を食べてしまうものも出現しました。一方、アリの巣の中に運ばれてそこで暮らし、葉を食べるためには外ま

で運んでもらうという種類のチョウの中から、アリの巣の中に帰ったときに葉を食べずに、そこにいるアリの幼虫を食べてしまおうという連中が出現したのだと考えられます。種間の協調と競争の関係が次々と進化することがわかりますね。

（『進化とはなんだろうか』長谷川眞理子）

※1～※3 シジミチョウ科に属するチョウの名称

問1 I「出し抜く」、II「上手」の意味として正しいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I「出し抜く」

A 計画を立てて相手に勝つこと。

I すぐれた手段で勝負にのぞむこと。

U だまされないように気をつけること。

E すきを見て、自分だけ先にすること。

II「上手」

A ずるい方法を使うこと。

I ほかよりすぐれていること。

U 相手よりもはやく実行すること。

E 誰も知らない新しいこと。

問2 — 1について、具体例はいくつあげられていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 二つ
- イ 三つ
- ウ 四つ
- エ 五つ

問3 — 2について、共生することにより、お互いにどのような利点がありますか。

「……という利点」に続くように四十五字以上六十字以内で答えなさい。

問4 Aの部分に入る文ア～エを正しくならびかえ、その順番を記号で答えなさい。

ア さて、幼虫が一度脱皮して二齢にれいになると、巣の中の葉ではなく、枝の先に延びた若芽を食べるようになるのですが、幼虫は、枝の先まで自分で歩いてはいきません。

イ アリに、触さわられると、幼虫は頭と胸を上にとらし、アリが運びやすいような姿勢をとります。

ウ 卵からかえった最初の幼虫である一齢幼虫いちれいようちゅうは、アリの巣の中で守られて葉の表面を食べて暮らし、アリは幼虫が出す甘露かんろをなめます。

エ アリが、幼虫を外に運び出し、枝の先の若芽のあるところまで連れていくのです。

問5 1 4 にあてはまる最も適切な語をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- ア そこで
- イ たとえば
- ウ ところが
- エ つまり
- オ そして

問6 — 3について、筆者はどのようなことが「ルール」だと考えているのですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ相手から攻撃されそうになったとしても、相手を攻撃してはいけないということ。
- イ お互いに支え合っている関係なのだから、相手に危害を加えてはならないということ。
- ウ 成虫になってからは、幼虫のときに暮らしていた巣にもどってはいけないということ。
- エ 共生相手には、自分のエサを提供するという恩返しをしなければならないということ。

問7 4、——5、——6の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 4は東南アジアに住んでいるチョウの幼虫のことであり、5は南アフリカに住んでいるチョウの幼虫のことである。

イ 4はオーストラリアに住んでいるチョウの幼虫のことであり、6は日本に住んでいるチョウの幼虫のことである。

ウ 5は南アフリカに住んでいるチョウの幼虫のことであり、6はオーストラリアに住んでいるチョウの幼虫のことである。

エ 5はインドネシアに住んでいるチョウの幼虫のことであり、6は南アフリカに住んでいるチョウの幼虫のことである。

問8 この文章で述べられているものには○、述べられていないものには×を付けなさい。

ア 三好達治の詩はアリとチョウの幼虫との密接な関係についての詩である。

イ 日本のクロシジミは、アリに蜜をなめさせ、アリの巣の中で羽化する。

ウ チョウの幼虫は、若芽を食べて巣にもどったときアリに食べられることがある。

エ シジミチョウ科に属するチョウの生息地は北半球にかたよっている。

オ 生物が互いに影響をおよぼしあいながら適応していくことを共進化という。

三 次の問いに答えなさい。

問1 () に当てはまる体の一部を漢字で正しく書きなさい。

※同じものは二度入りません。

① () をかける……好意的に世話をすること。

② () であしらう……そっけない態度をとること。

③ () が広い……知り合いが多いこと。

④ () がたたない……とても抵抗できないこと。

⑤ () がすく……心につかえていたものがとれること。

⑥ () が届く……自分のものにするができる範囲にあること。

問2 次のカタカナを漢字に直しなさい。

① 手をアげる。 ② 荷物をオう。 ③ 税金をオサめる。

④ イガイな出来事。 ⑤ 切手をシュウシュウする。

問3 次の作者と作品の組み合わせの中で正しいものをア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|----------|-----------|----------|-----------|
| ア | 枕草子—紫式部 | 源氏物語—清少納言 | 徒然草—松尾芭蕉 | 奥の細道—兼好法師 |
| イ | 枕草子—清少納言 | 源氏物語—紫式部 | 徒然草—兼好法師 | 奥の細道—松尾芭蕉 |
| ウ | 枕草子—樋口一葉 | 源氏物語—清少納言 | 徒然草—鴨長明 | 奥の細道—兼好法師 |
| エ | 枕草子—小野小町 | 源氏物語—紫式部 | 徒然草—紀貫之 | 奥の細道—松尾芭蕉 |

問4 次の①～⑧の作品の作者を後のア～コから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|
| ① | 一握の砂 | ② | 羅生門 | ③ | 小僧の神様 | ④ | 風の又三郎 |
| ⑤ | 雪国 | ⑥ | 坊っちゃん | ⑦ | 春 | ⑧ | みだれ髪 |

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|------|---|-------|---|------|
| ア | 志賀直哉 | イ | 川端康成 | ウ | 宮沢賢治 | エ | 芥川龍之介 | オ | 石川啄木 |
| カ | 夏目漱石 | キ | 与謝野晶子 | ク | 島崎藤村 | ケ | 有島武郎 | コ | 森鷗外 |

[illegible]

問 8

ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	

問3

利点

という

60 45 20

60 20

問 5	問 4
1	
	↓
2	
	↓
3	
	↓
4	
	↓

問 6

問 7

問 8

問 1	
①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	

問
2

④	①
⑤	②
	③

問
3

⑦	①
⑧	②
	③
	④
	⑤
	⑥

受験番号		氏名	
------	--	----	--

	
	
	

得点	
----	--